

第一回シリーズフォーラム「東京の地域学を掘り起こす」

# 杉田玄白と小塚原の仕置場

日時 二〇〇七年二月二四日(土) 一五:〇〇～一七:五〇

会場 荒川ふるさと文化館地下一階

開会挨拶	阿部忠資	3
趣旨説明	小林 克	4
発表 ① 荒川ふるさと文化館と地域住民	野尻かおる	5
発表 ② 「杉田玄白と小塚原の仕置場」展の回想	亀川泰照	12
コメント	土居 浩	18
質疑応答	小林(司会)＋野尻＋亀川	20
江戸東京フォーラム話題一覧他		23

## フォーラム趣旨

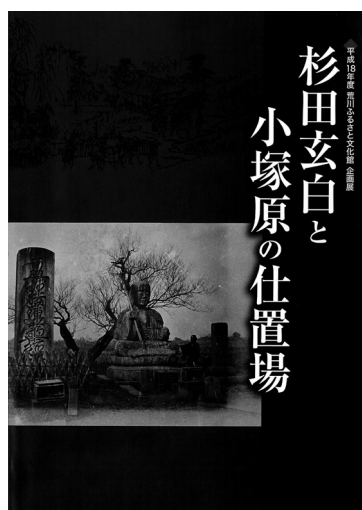
近世から近代への流れを一貫した視点で捉えようと、「江戸東京学」が生まれました。それは東京という地域を深く知る、一種の地域学でもあります。同時に、東京には異なる性格をもつ多くの地域があり、地域の資料館等では熱心な活動が展開され、優れた学芸員による膨大な研究が蓄積されています。そこで、江戸東京フォーラムでは、「東京の地域学を掘り起こす」というテーマのもとに、シリーズで地域の資料館等の活動を取り上げていきます。

シリーズの第一回は、荒川ふるさと文化館の企画展「杉田玄白と小塚原の仕置場」に焦点をあてます。

小塚原の仕置場は地域住民にとって身近な史跡です。なぜ、杉田玄白らの見た解剖の舞台が、小塚原の仕置場だったのかという素朴な疑問から、玄白らの活動を追い、さらに近代以降、仕置場跡が史跡として立ち上がってくる時代までを視野に入れて発表をしていただきます。そして、地域の文

化的資源・財産を再発見し、史跡・文化財を活用する方策を探ります。

また、講師として迎える専門員の方には、地域で活躍する研究者として、その価値ある仕事の系統的な紹介や、地域住民との関わりについても発表をしていただきます。



荒川区社会教育課長〔開催時〕

阿部忠資

荒川ふるさと文化館を所管しております社会教育課長の阿部でございます。本日は荒川ふるさと文化館へお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

皆様ご承知のことと思いますが、荒川ふるさと文化館は地域の歴史・文化といったものに焦点を当て、さまざまな調査研究をいたしております。そのような活動を地域や区民の方々に知っていただくために、いろいろな講座・催しを行っております。企画展は年に数回行っております、今回の「杉田玄白と小塚原の仕置場」もそうした企画展の一つです。

荒川ふるさと文化館には五人の専門員がおりますが、企画展は一人ひとりが熱心に調査・研究した成果の証です。今回は主任専門員の野尻、専門員の亀川が寝る間も惜しんで頑張ってくれました。

私は荒川区出身で西尾久に住んでいます。荒川で生まれ育った私より、荒川に關してははるかに彼らのほうが詳しく、彼らと話すとき非常に勉強になります。小塚原の仕置場という難しいテーマに取り組んだ彼

らの調査・研究に対して改めて感謝したいと思えます。

最後に、江戸東京フォーラムの第一回目のシリーズフォーラムとして、この企画展に焦点を当てていただきありがとうございます。住宅総合研究財団の皆様のご尽力にも感謝いたします。今後さまざまな点でお世話になるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

あべ・ただし  
一九六五年東京都生まれ。一九八九年に荒川区入庁。二〇〇六～二〇〇七年度社会教育課長。

## 趣旨説明

東京都歴史文化財団

### 小林克

本日のフォーラムは財団法人住宅総合研究財団(住総研)と荒川区立荒川ふるさと文化館の共催で開催いたします。

住総研は、住まいの総合的研究を深め、その成果の公開促進と市民・社会との交流をはかることを活動方針としている財団法人です。

その財団活動のひとつに「江戸東京フォーラム」という委員会があります。この委員会は江戸東京の歴史を近世から近代へと一貫した視点でとらえ、研究していくという江戸東京学の視座から活動を行っています。さまざまな分野の研究者等を招いての研究発表会やフォーラムなどを、一九八六年に発足し、二〇年以上にわたって企画・主催しています。

この委員会で、東京の地域学を掘り起こ

そう、地域研究をテーマとして取り上げようという声が挙がりました。具体的に申しますと、地域の博物館等では、非常に立派な、しかも意義の深い研究や調査活動を行っているところが多数あります。これらの地域博物館等と連携してフォーラムをシリーズで実施しようと考えました。その第一回目として、荒川ふるさと文化館と同館の企画展「杉田玄白と小塚原の仕置場」を取り上げさせていただいたというわけです。

この荒川ふるさと文化館では非常に活発な調査・研究がされています。また、それに基づいた大変おもしろい展示も従来からなされています。これらの活動内容については資料がありますので是非ご覧いただき、興味のある方は図録等も手にしていただければと思います。

本日、私たちはフォーラムに先立ち、小塚原の仕置場跡等を、学芸員や地域のボランティアの方に案内と解説をしていただきました。そのフィールドワークを踏まえ、フォーラムに臨んでいます。

これからのフォーラムでは、まず、同館の野尻かおる氏に「荒川ふるさと文化館と地域住民」について、続いて、亀川泰照氏に、企画展「杉田玄白と小塚原の仕置場」について発表していただきます。そして、ものつくり大学の土居浩氏に、発表をお聴きになつてのコメントをいただきます。同氏は京都の刑場と江戸の刑場の比較研究をなさっております。地理学、民俗学の専門家でもいらつしやいます。

それでは、第一七三回の住総研江戸東京フォーラム、そして、第一回目の「東京の地域学を掘り起こす」シリーズフォーラムでもあります、「杉田玄白と小塚原の仕置場」を開催します。

こばやし・かつ

一九五九年新潟県生まれ。日本大学史学専攻修了。一九八九年より学芸員として江戸東京博物館準備に携わる。江戸東京博物館オリジナルグッズ「今戸焼」など四シリーズを制作。共著に『掘り出された都市——日蘭出土資料の比較から』ほか。『昔のくらしの道具事典』で産経児童出版文化賞大賞受賞。

## 荒川ふるさと文化館と地域住民

荒川ふるさと文化館

## 野尻かおる

## — 荒川ふるさと文化館とは？ —

荒川ふるさと文化館(Arakawa Furusato Museum)は、平成一〇年五月一日にオープンしました。所属は荒川区教育委員会です。開館準備には、平成二年四月から平成一〇年四月末までほぼ八年かかりました。私どもは「博物館」という認識で仕事をしておりますが、オープン当初は「文化館」という名前から、文化センターのようなもの、コンサートホール、生涯学習施設、つまりカルチャーセンター的な施設ではないかといった誤解がありました。

博物館をつくり展示を行うためには、さまざまな情報、資料が必要です。それらを集めるための調査が非常に大変でした。情報が集まらないと展示業者主導型の博物館になり兼ねないのです。そのような懸念

もありましたが、幸いにして私たちは、文化館が出来上がる前から、文化財保護事業

を行っていましたので、文化館の準備は文化財係が担うことになりました。文化財保護をやりながら博物館をつくるというのは、経験のある方からみればとんでもない激務です。しかし、そのような組織になってしまいましたので、なんとか文化財係が中心となって博物館の準備に当たってきました。その経過については、『歴史評論』六二一号(二〇〇二年)に「行政の中の博物館」という論文を書かせていただきました。

さて、文化財係というのは、国の文化財保護法に基づく仕事もするのですが、区には昭和五七年に施行された文化財保護条例というのがあります、その条例に基づいた文化財の登録指定の作業を主な任務としておりました。

というのも、実は荒川区には国の文化財が一件しかないのです。「江戸の里神楽」という祭りのときの御神楽があるのですが、その神楽を行う松本社中という保存団体が国の文化財となっており、荒川区にとっての唯一の国指定文化財です。もちろん私たちの仕事はこの保護に当たるだけでなく、

埋蔵文化財の調査も行っています。

少し専門的な話になりますが、荒川区内には何カ所も埋蔵文化財包蔵地というのがあります。やむを得ず、開発のために遺跡が壊される場合、記録保存という保存の方法がありまして、発掘調査を行います。それに対する事務処理が私どもの仕事です。今日、皆さんが回った小塚原の刑場跡、南千住五丁目の火葬寺跡地は近世の遺跡として登録されており、実際に骨が出てきたり、骨壺代わりの焼物が出てきたり、おもしろいものでは徳利の中に骨が入っていたりといった事例があります。住民の方々にとっては多少複雑な部分はあるでしょうが、いまのところは協力的です。

平成一四年、つくばエクスプレスが敷設されるときに、ちょうど埋蔵文化財包蔵地にかかりましたので、刑場の発掘調査を行い、その成果の一部を今回の展示に出しました。そういった埋蔵文化財、荒川区の登録文化財、指定文化財の仕事が私たち文化財担当に多くの情報を提供してくれたわけです。

## — 荒川区の文化財の特徴 —

荒川区のイメージは、小塚原の刑場、寺

町の日暮りどりと何となく漠然としたものです。私どもが力を入れているのは無形文化財、つまり伝統工芸技術です。区には職人さんがたくさん住んでおりますので、無形文化財の登録指定に力を入れています。職人さんの世界は通常縦割り社会ですが、別の業種の人たちと交流を持ちたい、交流を持ちながら自分たちの文化財の保護をやっていききたいという方が集まり、「荒川区伝統工芸技術保存会」というものが出来上がりました。若い方からお年寄の職人さん、女性も含めて多くの方が会員です。この方々との交流から、皆さんがイメージする形のある展示物が提供されることは少ないですが、区の歴史のなかで培われた技術というものを見せていただけます。具体的には作品の素晴らしさ、使いこなした道具などから重要な情報提供があるわけで、それが荒川区の文化財の大きな特徴です。

それ以外に、有形文化財の所有者がおります。これは圧倒的に寺院や神社、つまり宗教法人が多い。その方々との交流を通して芋づる式に情報が集まってくるようになりました。その仲介を果たしてくださるのが、文化財保護推進員です。これは荒川区文化財保護条例にある制度で、地元の方々が文化財に造詣が深い、文化財に非常に関心があつて、保存活動にボランティアで参加してくださるような方々にお願しております。さらに、昔から地元で郷土史を研究している「荒川史談会」との交流からもたくさんさんの情報、所蔵者の確認といったものが私どもに寄せられます。そうした過程を経てこの文化館の展示が作り上げられてきたわけです。

また、館の立ち上げに並行するようにして荒川区史編纂事業が動いております。刊行は平成元年ですが、この区史編纂事業のなかで集まってきた情報もたくさんあります。刊行後、区史編纂室が解散するに当たって、収集した資料を私どもが預かることができたのも非常に大きな成果です。そういった情報のなかから、私ども専門職と乃村工藝社という展示業者とが打合せを重ね、今日ご覧になっていただいた、常設展示になっていくわけです。

乃村工藝社のつくりかたとした展示イメージは、荒川区の名前の由来になった「荒川」をテーマにするものでした。しかし、展示の最後に、長屋を復元しているコーナーがあり、それがあまりにも印象的なため、「荒川」の印象は背景に退いて、まち並みへシフトした常設展示となりました。

館の規模は四階建てで、荒川区の中央館的機能を持つている南千住図書館が併設されています。これは私どもにとっても文化館の利用者にとっても非常にありがたいことだと思えます。というのは、文化館が作り上げ、提供する展示には多くの参考文献が利用されており、それらをすぐ見ることが出来るからです。また、展示に対してさまざまな疑問をすぐに調べることもできます。

#### ——文化館の設置目的——



です。郷土の歴史・文化を楽しみながら学び、探究する場であり、また文化財の保護・普及の拠点としてさまざまな活動を行います」とあります。レジュメでは三カ所強調しましたが、私どもの博物館はこれらの機能を持つています、この機能を是非活用してくださいといった呼びかけのパンフレットとなっています。

#### ・情報の発信基地

情報の発信基地としての成果は、まだ理想を追いかけているような状態です。私の専攻は日本史(歴史学)ですが、荒川区での全域民俗調査にも関わりました。私が担当したのは伝説や昔話などですが、情報収集のために区内に調査に入りました。そこで得られた情報を一度館でストックし、ここを利用する方々の素朴な疑問から研究者の専門的な疑問に至るまで、それぞれの二

ズに合わせた情報発信ができればというつもりでやっております。それがきちんと果せているかどうかは判断がなかなか難しいのですが、情報を発信した先からのリアクションはあります。例えば、こういうことを調べたが、ほかにもこんなものを見つけたといった報告や、研究者の方からは論文をいただいたりします。それらをまた何らかの形で還元できればと思っております。

#### ・郷土の歴史・文化を 楽しみながら学び・探究する場

博物館の役割とは、ただ展示を提供するだけではありません。得られた情報を私どもの生の言葉で提供するための講座、専門家による講演会や教室、フィールドワークなどを行っています。それが契機となり、古文書を勉強したいといった方、郷土史のグループを作りたいといった方、まちおこしに興味のある方など、いろいろな方がいろいろな目的のために通ってくるようになりました。

#### ・文化財の保護・普及の拠点

一方、文化財の保護に関する事業は、あ

る意味私どもの首を回らなくしています。いま東京はバブル期を思い起こすくらい開発が進んでいます。南千住駅の東側にもマンションがたくさん建っています。駅の西側はもともとの古い町ですが、ここも再開発の対象エリアになっています。便利な千代田線が通る町屋地区、日暮里地区も、もともとは個人住宅が多かった所ですが、このところマンション開発が進んでおり、毎日のように確認や問い合わせがきます。遺跡があると地価に影響するので、有無を確認しに不動産屋さんもやってきます。この仕事が発業務を侵食するくらい増えてしまいました。

もう一つ、今日ご覧いただいたと思えますが、昔回向院にあった橋本左内の墓の套堂がないことに気づかれましたか。入口の右側の所に套堂という小さなお堂があったのですが、檀家との付き合い上境内の整備が必要になり撤去されてしまいました。幸い、地元住民の方々の署名もいただき区に寄贈していただくことになりましたが、忙しさにまかせて手を抜くと、文化財はすぐなくなってしまうのです。図録にも書いてあるように、いまそのお堂は文化館の後ろ



図1 荒川ふるさと文化館パレット

のテントの中で再現の日まで静かに眠っています。

もう一件。千住製絨所のレンガ塀はご覧になりましたか。まっすぐな道ではなく、グニャグニャと曲がった道に残っている古いレンガ塀が少しだけ残っているのです。これも荒川区の近代の歴史を語るうえで非常に大事な文化財です。しかしこの辺りも民間の開発がどんどん進み、保存するにはなかなか困難なものがありません。ただ、こういったフォーラムや展示を通して多くの人に関心を持っていただくことで残るチャンスが生まれます。文化財担当者、展示担当者と分けるのではなく、いつでも情報を共有できる形で活動できればいいと私どもは思っております。

### — 荒川ふるさと文化館の組織 —

荒川ふるさと文化館は、教育委員会の施設であることは既に述べました。そのなかの社会教育課の課長の下に、係長級の館長を置いております。常勤の事務職が三名、私も亀川も非常勤職員ですが、私は二年前から主任を仰せつかりましたので主任専門員が一名、ほかに専門員が五名（日本史専攻が

四名、考古学専攻が一名）という構成です。私は大学院まで古代史をやっていたのですが、ここでは、日本史しかわかりませんとか、民俗学は関係ありませんとは言えません。常勤職員も国民健康保険課にいた人や、元保母だった人もおります。また、館長は中学校で学校事務をやっていた人です。このように文化財畑ではないのですが、しかしここにいる以上文化財や博物館に関心がないという言葉は決して発してはいけないわけです。与えられた職場で、博物館を運営していくために、文化財を保存していくために自分は何ができるかということを考えてほしいと思っております。

よその館やシンポジウムで時々漏れ聞くのは、専門職と事務職の対立です。事務職は専門職がよくわからないと言うし、専門職は事務職が博物館をわかっていないと言う。学芸員は研究室にこもったきりで出てこない。かつてそんな愚痴の言い合いのようなシンポジウムを聞いてしまったことがあるのですが、私どもの所は非常に狭いところもあるし、九人しかいないので結構言いたいことを言い合うようにしています。お互いの専門分野を理解しあうための議論の

場をつねづね持っているつもりです。

例えば、今日見ていただいた展示空間は「亀川ワールド」と皆からよく言われるもので、非常に観念的な部分があり、わかりにくいところもあるかもしれません。しかし、これは亀川と私と、そして今日受付にいた事務職の小坂の三人がさまざまなことを話し合いながら、またほかの職員のバックアップや図書館の協力も得て作り上げたものです。

もちろん、地域住民の方々からの資料提供も大事です。今回の展示では、地元の回向院から、区の登録文化財になったばかりのものをたくさん出していただきました。館内に入つてすぐ右側、壁付ケース中の資料はほとんど回向院さんからお借りしたものです。

「墓帳とは何だろう」、「墓の分布図のようなマップみたいな資料があるな」、「回向院は無縁仏ばかり葬っていたはずなのに戒名があるじゃないか」など、いろいろな気づきやされたと思います。今後は回向院さんとの関係をますます密なものにし、資料的な価値を高めるような研究を重ねたいので、新たな情報提供ができればと考えております。



— 荒川ふるさと文化館の機能と展示 —

文化館の機能である調査・研究・収集・保存のなかで、私どもがもつとも力を入れているのが教育普及事業です。リピーターの方はよくご存じかと思いますが、常設展以外に企画展を年二回ほどやっております。これは図録を作成する展示です。今回は八〇頁、結構ボリュームがありますが、

大体六〇〜八〇頁の図録を年二回出しております。行政は施設をいかに有効に活用するかというところにシフトしてきますから、その間企画展示室はなるべく閉室しないで区民の方々に見てもらおうようにするといった方向性があって、常設展と企画展以外に館蔵資料展というのを実施しております。

館蔵資料展とは言葉のごとく、借りてくるのではなく、館内

と労力が必要だからです。資料の後ろに具体的な展示の内容が示してあります(表一)。これがオープン以来文化館がやってきた企画展の内容です。いちばん下の一〇と書いてあるのが平成一〇年のオープニングの展示で、その年はオープニング以外に企画展を二本行いました。そして平成一八年「杉田玄白と小塚原の仕置場」展まで、計二〇回の企画展を行っております。

にあるものを使ってあるテーマを作り上げ、展示することを意味しています。これは年三、四回やっています、博物館関係者は何となく汗がタラタラと出ているのではないでしょう。とか。というの、スタッフはいま五人いると言いましたが、一人が一つずつの展示を受け持ったとしても相当な時間

館蔵資料展を改めてカウントしたら合計三二回もやっております。三二回全部見た方もいらつしやるかもしれません。企画展示室を有効活用している展示の総数は九年間で五二回です。よくもテーマが尽きないものだとも感心するところがあります。

年度	タイトル
18	杉田玄白と小塚原の仕置場
18	あらかわとお野菜 都市とお野菜
18	特別展：牧野徑太郎コレクション展 日本浪漫派の中の青年たち—牧野徑太郎の交友録—
17	下町の空想画家—小松崎茂展—
17	あらかわと富士山—遙かな富士山 身近な富士山—
16	あらかわと寄席
16	特別展：植村和堂追悼展—書芸の世界との一期一会—
15	移りゆく街並み—王電・都電の車窓から—
15	千住製絨所とあらかわの近代—日本羅紗物語—
14	あらかわ祭事記—描かれたまつり・誌されたまつり—
14	ひぐらしのさと—江戸の名所と文人たち—
13	遊技の食—もんじゃの世界と懐かしの風景—
13	川と川—暮らし・想い・姿—
12	消えた娯楽の殿堂—君は東京球場を知っているか! ?—
12	ある詩人の交友録—牧野徑太郎コレクション展—
11	がんばれ! ニッポン—号外は語る ふたつのオリンピック—
11	あらかわと職人の歴史世界展
10	幕末の三筆展—貴名海屋を中心として—
10	皆川号外コレクション展—号外の歴史—
10	オープニング企画展：棟方志功作品展・平野富山・千里作彩色木彫展

表1 平成18年までの企画展(特別展)

ざっと見て、何か気づかれたかもしれません。世史の展示はやったことがないのです。別に荒川区に考古学資料がないわけではないです、古代・中世史の資料がないわけではないのですが、やはり展示のニーズと言いますか、何が見たい、何が知りたいかということに比べていくと、いまの町のベ

が、一人が一つずつの展示を受け持ったとしても相当な時間と労力が必要だからです。資料の後ろに具体的な展示の内容が示してあります(表一)。これがオープン以来文化館がやってきた企画展の内容です。いちばん下の一〇と書いてあるのが平成一〇年のオープニングの展示で、その年はオープニング以外に企画展を二本行いました。そして平成一八年「杉田玄白と小塚原の仕置場」展まで、計二〇回の企画展を行っております。

いってしまおう。また、古代・中世の資料はほとんど他館や国の施設から借りてこないと展開できないものですし、荒川区内の資料だけで賄い、展示することは不可能ですから、圧倒的多数が近世以降の展示ということになってくるわけです。

このなかで最も入館者が多かった展示は、私の記憶では「消えた娯楽の殿堂―君は東京球場を知っているか!?―」移りゆく街並み―王電・都電の車窓から―」で、秋葉系の人たちがたくさん来ました。前者はロッテオリオンズの前身を扱った展示でしたので、当時東京球場に通った方々とロッテファンが大挙して押し寄せました。図録は五〇〇部しか刷っていないかったのですが、すぐ完売しその後五〇〇部追加しましたが、いま品切れ中です。

今日皆さんにご覧いただいた杉田玄白と小塚原の仕置場展の入場者はそれを超えそうな勢いです。初日から三日間は連休ということもあって、七〇〇人ぐらいいらっしゃいました。なぜこんなにいいのか、なぜこの図録が売れるのか。まだ二週間しか経っていないし終わってもないのですが、これからの展示を作り上げていくために分

析する必要があります。先ほど陣内秀信先生と道すがらお話したのですが、一つには住総研のネットに展示情報を載せていただいたことが結構大きかったのではないかと思います。

### ― 荒川ふるさと文化館の展示の作り方 ―

最後に展示の作り方についてお話しします。これはおそらくこの博物館でも同様の方針を持っているのではないかと思います。常設展示の冒頭は縄文時代の貝塚の展示があり、次に環濠を伴う弥生時代の道灌山遺跡の展示があり、次は、地味ですが私が担当した中世の板碑から文化的交流、人的交流を分析するといったコーナーが続きます。近世にはさらに細かいコーナーがたくさんあります。来館者からは「なんだ、資料がちよっとしかないじゃないか」「簡単にしか書いてないじゃないか」といった感想をいただくこともあるのですが、展示をまとめるために集められた大量の情報を削いで、削いで、最終的に残ったものがあれなのです。一つひとつのコーナーで企画展示ができるほどに考えて作り上げております。

仕置場については、荒川区の史跡、文化財と言えば小塚原の仕置場と言われるからにはきちんとした形で位置付けなければいけないという考え方がありました。また、私の夢としては火葬寺を展示できたら画期的ではないかと考えています。人生儀礼のなかでしか扱えないかもしれませんが、日本人にとって火葬とは一体何だろうということ、その一方で、つい最近まで荒川区にあった土葬という習俗なども一回きちんと分析し、空間の中に表現できないか、そのような夢もっています。

展示にはイレギュラーなものもあります。表の上から三番目に「牧野徑太郎コレクション展―日本浪漫派の中の青年たち―」というのがあります。牧野徑太郎さんは俳句も詠む日暮里生まれの詩人ですが、牧野さんから資料を提供していただくことになりました。さらにイレギュラーだったのは、平成一三年の「遊技の食―もんじゃの世界と懐かしの風景―」です。これは私どもの提案ではなくて、地元のもんじゃ焼屋さんの発案です。荒川区は、実は月島よりも早くもんじゃ焼が始まったんですね。しか

しこの展示はかなり大変でした。もんじゃ焼屋が子どもにとってどのような空間なのかといった研究は多少あるかもしれませんが、もんじゃ焼そのものについての研究などなかったと思います。さらにもんじゃ焼そのものを展示することはできない。漫画のなかに出てくるもんじゃ焼とか、皆さんの記憶のなかに現れてくるもんじゃ焼などしか出せないわけです。それに、もんじゃを具体的に知らせるためにはジュージュー焼かなきゃいけない。焼く場所も用意しなくてはいけない。結局、苦肉の策で、入口の所にテントを張り、急遽もんじゃ焼屋を作り体験してもらいました。

そのころから、うちの文化館は結構「怪しい」のではないか、観光事業にどんどんシフトしていいのではないかとというような感じがしていたのですが、実は、それは時を待たずしてやってまいりました。東京の一角をなす荒川区には、もともと観光地として注目してもらいたいという発想はあまりなく、むしろ、住宅地や商業地で、あるいは工場用地としてどうかという提案しかしてきませんでした。それが「江戸東京ブーム」にも影響され、「都電がまだ走って

いる唯一の町」が集客につながるということに気がつき、荒川区の商工振興部門に観光振興係が出来たわけです。いまは観光振興課に昇格していますが、要するに、行政が観光に本当に力を入れてやるぞという方向にシフトしたわけです。そして『散歩の達人』やJTBの町めぐりの本、女性誌などが荒川区を頻繁に取り上げるようになりました。また、アニメ雑誌からは、声優さんに文化館の長屋で浴衣を着せて撮影をしたという要望がきました。このように、区外からの注目度で区を観光スポットとして位置付けようということになったのです。

それまでは文化財保護という事業を一生懸命やっていればよかったのですが、そこに観光事業が付加されたわけです。今年には観光ボランティア養成講座を行いました。その講座の講師を務めたのは私どもの専門職のOBです。これは、教育委員会の文化財の説明ではなく、町を楽しく見せる方法を伝える講座です。

今日のまちあるきは、私と専門員の加藤と地元の南千住にお住まいの富田さんが皆さんをご案内しました。富田さんには、刑場の面積やら移転の時期、あるいはどこに

回向院があり、晒し場はどこかなどといった、あとで展示の図録や展示空間で確認できるようなことは話さなくてもよいと伝えていました。数字を並べるよりも、例えば南千住に住んでいる方の松尾芭蕉観といったものをアピールしてもらおう方がよいとの考えからです。このように、私たちは観光事業のオペレーターのようなところに位置付けられつつあります。これは、ある意味集客も期待できるのでとてもうれしいのですが、九人で何とか運営してはいるものの本当に倒れそうです。それでも何とか継続してこれたのは、このような会場にたくさんの方々に来てくださり、私どもの言葉に耳を傾けてくださるからなのです。私の話はこれで終わります。

のじり・かおる

一九五九年栃木県生まれ。駒澤大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了。専門は日本宗教史。荒川ふるさと文化館主任専門員（開催時）を経て、現在同館副館長（総括学芸員）。駒澤大学兼任講師。論文に「近世都市江戸における火葬場の成立と変容―小塚原「火葬寺」を中心として―」（江戸・東京近郊の史的空間）、雄山閣、二〇〇三）ほか。

## 「杉田玄白と小塚原の仕置場」展 回想

荒川ふるさと文化館

亀川泰照

今回の展示は、仕置場の機能の紹介、杉田玄白を筆頭にした江戸時代の解剖学、地域の仕置場の三つのコーナーでの構成されています。展示が始まってまだ二週間しか経っていないので準備期間のことを回想しつつ、今日は展示の目的や表現しようとしたことを中心にお話したいと思います。

### ―― 展示の企画・構成の六つの経緯 ――

展示に至る、まず一つ目の経緯は、つくばエクスプレスの開通にもなう発掘調査が行われたことです。実は仕置場は周知の埋蔵文化財包蔵地として、発掘調査報告書を作成する過程で、仕置場を直近に文章解説する必要が生まれました。ここで文献史料の調査員として仕置場について調べるこ

とができ、基本的な文献をたくさん集めることができました。そして今回その成果を展示に生かすことができました。

二つ目の経緯は「人権尊重の学習を行っている区内小学校の先生との対話」及び「授業への対応」です。杉田玄白が小塚原の刑場で人体の解剖を見て、『ターヘル・アナトミア』の正確さに感動し、翻訳書である『解体新書』を刊行した、という話はよく知られています。この一連の話に加え、地元の小学校では、実際に解剖をしたのは玄白ではなく、被差別民だったという『蘭学事始』にでてくる話を、人権尊重学習の題材に取り上げています。これは教科書にも出てくる話ではありますが、先生方も教科書以上のことを調べられていて、私も依頼されて話をする機会を断続的にもちました。学校教育の場でも教えられているという事実は、展示に繋がる強力な理由付けになりました。

三つ目の経緯は、東京都人権学習研究奨励事業への参加です。これは、館の専門職員及び事務職員による、勤務時間外の勉強会で、三年間活動してきたものです。野尻さんから『歴史評論』六二二号（二〇〇二年）の

話がありました。荒川区では私が入る前から、小塚原刑場が史跡であることや火葬場が埋蔵文化財包蔵地であることは、表現しなければいけないものという位置付けにあったと思います。けれど具体的には別途合意が必要です。

当たり前ですがこれを区立の博物館として表現するのは学芸員の「自由」ではありません。表現することで、区としての姿勢を表示することになります。対外的にはもちろん、対内部的にも了解を得る必要があります。この取り組みのなかで館内の合意がつけられていった感触が私にはあります。ここで私たちが学んだことを、ごく簡単に言ってしまうえば、当事者の了解を得るということでした。今回の展示では、展示をする側としての区内部、展示の対象としての地域住民、そして資料の所蔵者などに了解を得ていくという作業を徹底して行うことになりました。

四つ目の経緯は文化財調査です。これも当館の仕事の一つなのですが、昨年度は「小塚原刑場跡」が指定史跡になり、今年度は「回向院文書」が登録文化財になり、それぞれ調査を担当させてもらいました。こ



れて時間を持って資料に向き合えまし  
し、またそれ以上に、資料所蔵者であり、  
この展示の当事者でもある回向院と親しく  
なれたというのは大きかったと思います。

五つ目の経緯は文化財保護です。回向院  
の境内墓地の整理がありました。先ほど  
フィールドワークのときに案内人を勤めて  
いただいた富田さんが回向院の檀家さんで  
して、整理の話は最初に富田さんから聞い  
た記憶があります。当館で行っている地域  
史講座の参加者に呼び掛け、手伝ってもら  
い、墓石に刻まれている文字はあらかた記  
録することができました。

また六つ目の経緯として、私が担当して  
いた古文書講座で、区民の方々と幕末の解  
剖関係の古記録を読んだのですが、それを  
図録に反映させることができました。

―― 企画にあたって―念頭にあったこと――

企画に当たって念頭に置いたことは、「負  
のイメージ」です。江戸時代、大勢の罪人  
が処刑された小塚原刑場があり、少し歩く  
と、日雇い労働者が多く住む簡易宿泊街の  
山谷地区があり、これらの事実が南千住の  
「負のイメージ」のもとになっていると思

います。私の感触では南千住の住民もおそ  
らくその負のイメージを持っていて、でも  
他人からそう言われて嫌な気持ちになる、  
というような複雑な思いがあったかと思  
います。一般には罪人が処刑されたというイ  
メージがふくらみ、流通しているという状  
態があると考え、これを何とか打破したい  
と思いました。

それからもう一つ。近世では何も徳川家  
だけが刑罰権を持っていたわけではなく、  
全国の大名がこの権限を分有していまし  
た。にもかかわらず、なぜ小塚原や鈴ヶ森  
が刑場の代表的な存在とされるのか、そん  
な疑問でした。

展示目的(企画書より)

- ① 区民が、地域の歴史・文化と改めて向き合い、地域の文化的資源・財産を再発見するためのきっかけとする。
- ② 史跡・文化財を活用し、地域に還元する。
- ③ 近年の発掘調査成果を展示に反映し、区民に還元する。
- ④ 杉田玄白の故郷である福井県との文化交流を深める。
- ⑤ 教育委員会人権学習講座と連携することで、有機的な展開を図り、人権学習に寄与する。

刑場は明治の初年に機能を停止するの  
ですが、それ以降の歴史についても紹介でき  
ればと考えて企画書を作りました。

企画書に挙げた展示目的の①は、もしか  
すると区民が見たくもない歴史かもしれま  
せんが、そういうものと改めて向き合う場  
にするということです。ただこれは文化館  
のすべての展示に当てはまることで、この  
展示も例外ではないということです。

②は、史跡や文化財を積極的に活用して  
公開していくということ。③は、平成一四  
年から始まる発掘調査成果を、なんとか展  
示に盛り込んで反映させること。④は、荒  
川区が杉田玄白の故郷である福井県と交流  
しようとしているということ、その意味  
合いも企画書に盛り込みました。また、⑤  
として、先ほど触れたとおり、杉田玄白の  
話が被差別民の話とも絡み合っていること  
もあり、教育委員会の人権学習講座と連携  
を図り、なにがしかのことができればと計  
画しました。これが翌々週行われる人権  
フォーラムです。

こういった目的を掲げ、その結果が皆さ  
んに見ていただいた展示ということになり  
ます。



## 展示の概要

### 一、小塚原の仕置場があるマチ

展示で表現しようとしたことをまとめる  
と、近世の仕置場の実像と地域住民の仕置  
場跡との付き合い方になります。そういう  
ことが三部構成のこの展示に、どのよう  
に振り分けられているかという以下のよう  
です。

第一部は、小塚原の仕置場の成立と環境  
です。展示をご覧になり、町を歩かれた方  
はお分かりになると思うのですが、当時の  
仕置場周辺は実は現在とはまったく異なる  
風景です。周りに田圃しかなく、しかし日  
光道中に面していた。そのあたりをいろい  
ろな絵図で紹介しております。田圃しか  
ないというのは、なにもないという言い方  
されることもあります。田圃があつたとい  
うことを強調しているつもりです。仕置  
場の前を通った人の記録を読んでいると、  
草がぼうぼう生えて云々という記述がま  
まあります。田圃は人の手が入っていますの  
で、それとは違う空間として見えたのだろ  
うということを強調したかったわけです。  
ここで一つ図録にあって展示室になかっ

た切絵図を紹介します。なぜ展示しなかつ  
たかと言うと、これは市販されているもの  
では白抜きにされている部分が載っている  
絵図なのです。被差別民の「非人」などの  
表記を削ってあります。出版社の配慮は  
はさておき、当時の差別状況もわかってい  
なければ、当時の仕置場のことは本当はわ  
からないのではないかと。当初はこれを展示  
しようとしたのですがそこは台東区内で、  
別途調整が必要な地域です。区と区の窓口  
にはそれぞれ人権担当の部署があり問題は  
そこで調整することになっているのです

が、台東区は基本的には扱わないというス  
タンスで、結果、表現される当事者である  
台東区の了解を得られず、展示を控えたわ  
けです。

図1は仕置場の諸機能を示しています。  
展示した回向院の文書などから作ったもの  
で、黒い線が死体の流れ、四角は仕置場の  
大枠です。

仕置場の機能としては、大きく「刑罰」と  
「埋葬」があります。火あぶりの刑や磔、こ  
ういった刑罰を行ったあと、死体は埋葬さ  
れます。これらの仕事は、およそ回向院や  
そこにいた非人身分の人などが担ってい

ました。そのほか、試し切りと腑分けが刑  
死者の死体の一部を使って行われていま  
した。

さらにもう一つ、発掘調査がきっかけで  
わかったのが徳川家の馬の供養です。江戸  
時代には、どんな地位の人の馬でも皮革と  
して資源化されていくシステムがありました  
。ですから馬は基本的に供養できないの  
ですが、裏技があつて、それが回向院の  
中で葬るという方法だったようです。発掘  
調査で木柩に入った馬の骨が出たとき、当  
時の調査担当者から「これは何だ」と訊か  
れて調べてみました。延命寺には、「馬頭  
観世音」の石碑が立っていますが、裏に回  
ると「乗馬供養塔」と刻まれています。

図の左から伸びている線は、牢屋敷から  
来る死体と、行倒人などの死体です。行倒  
人のイメージがいちばんわかりやすいと思  
うのですが、仕置場に来る死体は「無縁化」  
された死体、そのような理解で展示してお  
ります。例えば解剖に使われる死体は、勝  
手にされても供養する人がいないという  
法的な論理の下、解剖に利用されていた、  
そのようなことを展示したつもりでおり  
ます。

この「埋葬／供養」がどういうものかは、回向院に残っている過去帳類でわかりました。展示では、歴史的人物である橋本左内が記載された部分を開いておきましたが、回向院ではちゃんと戒名を付けてそれなりに供養していたということがわかります。解説作業のなかでわかったことを一つ挙げます。戒名の上にある「タ」や「ヨ」という

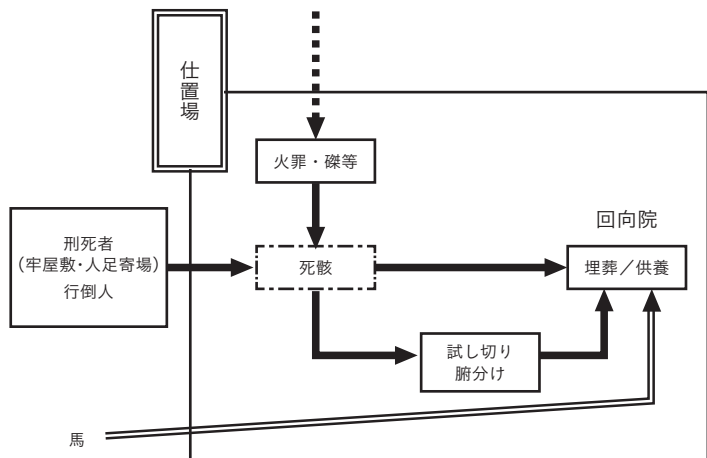


図1 仕置場の機能

記号が何を意味するのか当初はわかりませんでした。ところが、目録作成のための整理をしているときに、「墓帳」という簿冊が出てきて、そちらにいくつかのカタカナの記号があり、それが回向院の墓地の区画を表しているのではないかと理解できました。

橋本左内は幕末の志士なので、近代の顕彰によっていろいろな記録が活字になっています。それらに目を通すと、左内の所属する越前藩は、左内の処刑後とりあえず死体の確保をしなければいけないということで、回向院に手を回して確保し、香料を払ってお墓を建てたとあります。そういう形で回向院にお布施を払った方々のお墓が当時の回向院にあったということがわかります。その後、左内の墓は改葬されて国許に移設されます。吉田松陰の場合は、現在の世田谷区の松陰神社、毛利家の下屋敷があった場所に改葬されています。「墓帳」という簿冊には、追記が結構あり、簿冊の存在は、どこに誰が埋まっているかということを知ることができ、そのことを回向院側が把握する機能を担っていたのだらうと推察できます。こうした改葬に至るサイクルは非常に早いのですが、墓

地経営のようなことがきつとあったのだらうと想定して展示を構成しました。

## 展示の概要

### 二、小塚原における観臓と江戸の解剖

第二部では回向院における解剖を取り上げています。解剖は仕置場の機能の一つなので、バランスとしてはあまりよくありませんが、杉田玄白を取り上げることは、展示の導入としても、展示実現のためにも大きく扱う必要がありましたのでこのようになりました。解剖というと杉田玄白ばかりが取り上げられるのですが、実際にはいろいろあり、今回は仕置場の機能の一つとして、制度的に行われていた解剖の展示を目指しました。

確認できた解剖は、大きく分けて御用解剖と社中解剖です。御用解剖とは、幕府の、後に東大医学部になっていく西洋医学所の医者たちが行った、お上からお金が出る解剖です。社中解剖は、町医者など、自分でやらなければいけない人々による解剖です。この二通りの解剖は小塚原の仕置場の回向院の裏に小屋を建ててなされていたということがわかってきました。

この解剖にはどれだけお金がかかったのか

というところ、ある記録によると、死体の確保がいちばん大きく、それ以外に回向院に手数料を払ったりしています。社中解剖の場合、メスや麻糸などの道具類も全部社中のほうで揃えなければならなかったようです。こういった資金をどのように集めるかというと「解剖入覧券」というチケットのようなものを先行販売し、そのお金で解剖を行っていたようです。

明治になると刑死者の遺体を刑場の外に出してもよいことになり、解剖は医学部の中で行われ、解剖の場という仕置場の機能は消滅します。そしてその後、医者たちの特定の団体(例えばいまの日本医師学会)が回向院の境内に観臓記念碑を建てます。これは杉田玄白の事績を顕彰するためのもので、もともと地域住民とは関係のないものです。このようにして医者たちの間で回向院が医学の歴史の重要な場所として位置付けられていきます。献体第一号と言われている文京区の念速寺にある美幾女の墓なども同じです。近代になるとこういった場所が見出されてくるということがあります。そしてこの話題をブリッジとして第三部の

「地域の中へ」という展示に移ってきます。

### ―― 展示の概要 三、地域の中で ――

ここで説明しておかなければいけないことは、田圃に囲まれた空間が、なぜ今のように宅地に囲まれてしまったのかということです。それを最初に前振りとして展示しております。

当館の展示は近世の話題でも現在に至る経過も含めて紹介することが多々あるのですが、近代をよく扱います。そこで繰り返してきた話ではあるのですが、荒川区域は関東大震災を契機に、中心域から工場の移転やそれに伴う従業員の宅地開発が進みました。そんな人口が爆発的に増えた時期があるのです。そのときに、土地をどこに求めるかというところ、それまで耕作に不向きだという理由で使っていなかった土地です。これによって、回向院や仕置場跡も宅地に囲まれていきました。

もう一つ、これは仕置場の個別事例になりますが、鉄道が敷かれたという事実があります。今、JR常磐線と東京メトロの間に首切地蔵があり、その姿を見ようとすれば電車の中からも見えるのですが、仕置

場跡に線路が敷かれた結果、もともと仕置場にあった骨やお墓といったものが回向院のほうに改葬して移動される、そういった事態が進行していきます。いま仕置場跡と言っている線路の上を指さす人はあまりいないと思いますが、回向院・延命寺が頭に浮かんでしまうのは、開発に伴うものだったということを示しているつもりです。

これを踏まえて改めて戦前以来の自治体史などを見ますと、大体地域の名所旧跡が出てくるのですが、仕置場の物語のなかには杉田玄白の話はまったく出てきません。初登場は、昭和一年のことです(「荒川区史」)。地域では、それまでは仕置場を語るために杉田玄白は必要とされず、いないに等しい状態が続いてきました。いくつかの資料から、地域で仕置場がどのような要素の組合せで語られてきたかをまとめたのが図2です。aは仕置場の概要です。寛文七年ごろに浅草から移動してきて、刑罰が行われたというようなことを記す定形の語りがあり、それプラスbの幕末の志士などを語るパートがあって、cの杉田玄白の観臓記念碑の話があります。これらはいろいろ推移していて、昭和一年に初めてこの三

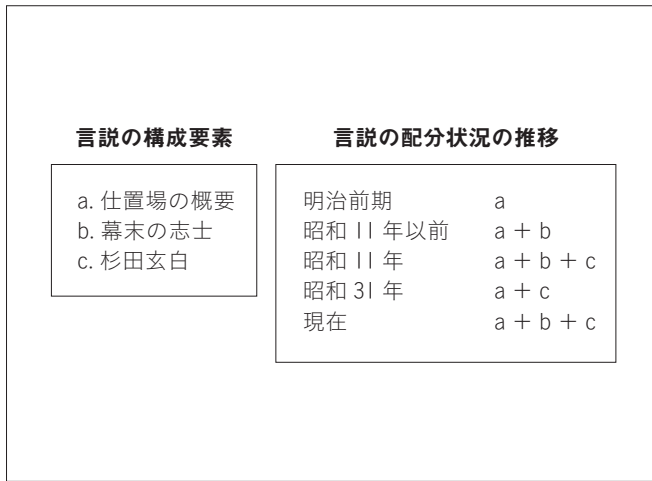


図2 仕置場の“物語”と配置

つが出揃います。  
 区の教育委員会が昭和三十一年に建てた史跡説明板の写真が文化館に残っています。これによると、aとcの組合せになっています。bの橋本左内や吉田松蔭が一度引っ返す。この頃の新聞記事などを読むと、戦時中は幕末の志士が勤皇という

ことで結構大きく取り上げられて、軍服を着た人たちが回向院に出入りしていたけれど、今はお参りする人はいない、と書かれております。戦後間もない時期は志士の話が後退したのだと思います。現在また三つが出揃って語られています。

このことから言えるのは、地域では歴史を見出したり、忘れたりという選択をしてきたということです。展示を見に来てくれる区民の方々には、このあたりのことを見ていただけるといいなと思っております。

最後に、もう一つ面白いと思っております。は、コッ通り商店街のサトウ眼鏡所蔵のチラシです。昔、首切地蔵を中心にした縁日があり、見世物がいっぱい来たとか、屋台がいっぱい出たという話があります。このように地域には、首切地蔵を史跡とはまた別の観点から見て、意味付けしてきた歴史があったのではないかと思っています。残念ながら資料が揃わなかったのでパネルで表現することになってしまいましたが、それでも展示に組み込むことができました。これに関連してもう一つ。コッ通り商店

街の杉山さんという方が『コッ通りの一口話』という本をまとめています。そのなかで、なぜ地蔵の縁日が毎月五日、一四日、二七日なのかについての記述があります。杉山さんが地元の方から聞いた話によれば、二七日は吉田松蔭が処刑された日だからと、理由付けがあったそうです。地蔵の縁日は、そのような歴史と折り合わせて理解されていたということは興味深い話だと思います。

第三部の展示は、私一人ではなく、野尻さんとも相談しながら構成しましたことを付け加えておきます。展示は雑然とした終わり方をしていきますが、今後もまた仕置場はいろいろな取り上げ方をされていき、移ろっていくだろうと個人的には結構期待をしつつ終わりにしております。

それでは報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

かめかわ・やすてる  
 一九七三年神奈川県生まれ。駒澤大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了。



ものつくり大学

土居浩

私がここへ呼ばれましたのは、しばらく前に罪人引き廻し経路を歴史地理学的に分析したことがあり（場所と物語―京都の罪人引き廻し伝承を事例として―『人文地理』あ）まして、その興味の延長上で江戸の刑場についても関心があったので、こちらの館へも足繁く通っております。

私が対象としたのは、京都における江戸時代の引き廻し経路でした。歴史のある京都は、罪人や刑罰についても、徳川幕府以前に遡ることができません。たとえば中世では、生首を戦場から持ち帰り、見せしめのために都の中を巡らせる「引渡」も行われていました。ただ私は、史実よりも伝承や過去のイメージに興味があったことと、都市を読み解く方法論に関心があったこととが重なり、当時としてはブームが過ぎていた江戸東京論の延長上に、試行錯誤しつつ、前田愛さんはもちろん陣内秀信さん

の著書も読み、一番インパクトを受けたのが、江戸時代の怪談や世間話を分析して、どの辺りが不思議な場所なのかを分析した、歴史地理学の論文（内田忠賢「江戸人の不思議の場所」『史林』な）でした。この延長上で京都の事例を取り上げた私の論文を、直接に知り合う前から読んでいて下さったのが、この館の野尻さんであり亀川さんだったのです。その意味では、以前より興味関心を共有していたことになりました。

野尻さんや亀川さんに教えられ改めて問い直した点なのですが、今現在そこに存在するモノは、いったい誰がどんな理由でそこへ設えたのか？ 今回は京都における東の刑場であった、粟田口刑場跡に現存するモノについて紹介します。

本日の展示室入口にも大きな題目碑がありますが、粟田口刑場跡にも題目碑が建っています。上下で色合いが違います。斬られていたわけですか。どうやら今回の展示にも深い関わりのある谷口氏による建立、つまり小塚原の同一人物の手に依る石碑ではないか、と亀川さんは指摘されます。ちなみに粟田口には新しい題目碑もあり、こちらは近代になってから法華クラブ（京都駅

前にあるホテルです）の創始者が建立したものです。

また粟田口には名号碑もあります。こちらも「南無阿弥陀仏」の上下で色が違いました、以前は切断されたことが分かります。江戸の享保年間に木食正禅上人なる僧が、無縁供養のために建立した後、近代になってからしばらく忘れ去られていたところ、昭和三〇年代に再発見されました。その再発見にも縁のある、京都石仏会という民間団体による解説板が立っています。

題目碑にせよ名号碑にせよ、いずれも民間の人たちによる活動がなければ、そこがかつての刑場だったことを今に伝えるモノは現存せず、ただ記録の中でしか確認できなかったでしょう。それは過去のイメージ形成において、大きな違いであることは間違いありません。

このように考えますと、荒川区の公的な組織が企画展として取り上げることが画期的なことですか。おそらく、私だけではなく、ご出席されている方々も「よくぞ展示ができたものだ」と感心されていると思います。

さて、先ほど亀川さんから発表がありま



したように、展示は三部構成になっていきます。一部がいわゆる刑罰の歴史です。二部が医学史（専門用語では「医史学」）の研究関連です。三部が、地元でどう歴史が構築されていくか、もしくは、歴史がどのように思い出されてきたか、を展示しています。

研究分野から見れば、医学・解剖の歴史は医学史ですし、刑戮・刑罰の歴史は法制史になります。近代どのように歴史が改めて立ち上げられてきたかについては、そこそ最近ようやく文化研究の人たちが注目している領域です。これらの諸領域をトータルに捉えないと、地域の歴史は見えてこないだろうな、と今回の展示を拝見しながら感じました。例えば、杉田玄白に興味がある人は、ほかを観ないで玄白関連だけを観て、資料の不備について指摘されるかもしれません。しかし、江戸の小塚原の刑場跡地を含むこの地域の歴史を考える際、一部と二部を踏まえないと、近代にこのように歴史が改めて見つけられてきた経緯は、了解されないだろうと思います。

ところで博物館めぐりをしていると、観覧者の会話が洩れ聴こえてきます。例えば今回の展示ですと、刑罰の種類を展示する

コーナーで『下手人』というのは犯人のことと思っていたけれども、刑罰の一種なんだねえ」と、会話している人たちがいました。「ああ、なるほど。この観覧者は、これで知識が一つ増えたわけだ。ちゃんと展示が役に立っている」と、一人納得したものです。そして先ほどのことですが、小学校の女子生徒四名の集団に遭遇しました。常設展を過ぎて企画展に気づき、「骨があるよ！」「馬だけではない、人の骨もあるみたい」と。そのうち一人が「あーほら、あれだよ！」と言い出しました。さて、どうまとめるのかなと思いましたが、「ほら、戦争のときバーンって、服も何も破れちゃって。その骨が埋まったんだよ」と。彼女たちはこのようにして、歴史を遡って、知っている歴史知識を切り貼りするわけですよ。いままで自分たちが勉強したことや関係しそうなこと、もしくはちょっと聞きかじったことのある歴史の知識を総動員して、「こういう歴史の証拠がここにある」というように、彼女たちは自身を納得させたのだろうなど、私は理解しました。彼女たちが成長しても、この荒川区に住み続けて、きちんと展示の趣旨を理解して、荒川区の歴史

を考えるようになるまで、まだまだ、「荒川ふるさと文化館」の役割は重要であると、しみじみと感じました。

皆さんもこの展示図録を読み直すに際して、おそらく自分の興味・関心のなかで位置付けることと思います。私自身もそうですが、実際のところ、この資料を使えそうだなとの見方で読んでしまっています。それと同時に、やはり表現したい側の趣旨を汲み取ったうえで、その趣旨に沿ったこの部分の表現はどうか、というような展示の《見巧者》になると言ったらいいのでしょうか。そういう見方が今後、外部の人間として地域博物館を観覧する際には、必要なことではないかと感じている次第です。

どい・ひろし

ものつくり大学准教授。博士(学術・一九九九年・総合研究大学院大学)。国立国際日本文化研究センターCOE研究員。ものつくり大学専任講師(開催時)を経て、二〇〇七年より現職。共著に『風景の事典』(古今書院)、『記憶』(朝倉書店)ほか。

## 質疑応答

司会(小林)——質疑応答の前に、土居さんのコメントに対して、亀川さんと野尻さんからご意見をいただきます。

亀川——今回の展示において、比較対象としたのは、主に鈴ヶ森でしたが、土居さんのコメントをお聞して、鈴ヶ森でも京都でも、要は地域住民が仕置場について何らかの思いを持っていて、その差が現状の違いになっているのかなと思いました。それを地域的特徴と言えるとすれば、この展示でそれがある程度は反映させることができたような気がしています。実は私が展示構成を考える際にもっとも意識したのは地元の南千住の方々でした。この地域の住民の問題意識を展示に反映させようと思いました。とはいっても、その問題意識も、私が勝手に感じているだけのもので、みんなが同じ考えを持っているとも思いません。

しかも限られた資料で再構成した展示が、土居さんの話のように、結局「つまみ食い」されるといふ二重の誤解のもとが含ま

れているのも事実です。この辺は事後的にしか判明しないので、とてもやっかいですが、そういう意味で、図録は後世に残ることも念頭に作っています。これを足場に問い直されればいいと思いますし、そんな活動もしていきたいと思います。また、土居さんから鑑賞をしている小学生たちの会話を教えていただきました。その子どもたちも将来、このテーマに関心を持ったときに、図録を紐解いてもらえればと思っています。野尻——その話を続けますが、小学生の子どもたちに対して博物館が提供するものは、正しい歴史の理解ではなくて、歴史に対する関心を呼び起こすきっかけだと考えています。中学校、高校に進み、歴史を学んだとき、あのとき見たのはこうだったのだ、と振り返ってもらえればいいと思っています。

この文化館の周りに「瑞光」という地元の鎮守にまつわる名前が付いている小学校がいくつかあり、放課後よく訪れてくれます。彼らがここを遊び場として、地域に関心を持つてくれればいいと思っています。多少の誤認は大目に見たい。もちろん、戦争と刑場では大きく違うのですが、どうも埋葬

の場所があるのだ、そういうことで発掘調査があつていろいろなものが出土した、考古学は面白いなとか、そういうレベルの関心を呼び起こせば十分だと考えています。彼らが再来場して、違う見方をするかもしれません。それを楽しみにしています。

ちなみに、当館では「子ども博物館」を夏休みに実施しています。このなかに「リトル学芸員」という体験学習があります。例えば、浮世絵を見せて彼らなりの絵解きをやらせたり、子どもたちに自分で資料を解説させる。なにも知識がなくていいから絵解きをさせる。自分で解説文を書かせて展示をさせる。そのような学芸員の仕事のごく一部を体験してもらうことを行っています。これが博物館に対する関心になれば、学芸員予備軍がいれば、地域に関心を持った子どもたちが育てば、という期待を持ちながらやっています。

今回の展示構成は一〇三部です。三部は強引につなげたように見えるかもしれませんが、三部が大事なのです。次は一部です。二部は一部のある部分を詳しくしたもので、それを受けて三部が展開します。これが、私たちの展示ストーリーの組み立てです。

そして、私たちは展示に対して、批判的な目というか、これは何を言おうとして、こういう空間を作ったのだろう。どうしてこの資料を選択せざるを得なかったのだろう。こういうものがあるけれども、この担当はなぜこれを使ったのだろうか。後ろ側にあるものを読み解くようにしています。

ですから、入館者が「つまみ食い」をしてもかまいません。しかし、展示ストーリーのなかにメッセージがありますから、どなたかお一人でも結構ですから、展示の冒頭の目的から見ていただきたい。なかには、よく読んでくださるありがたいお客さんもいらっしやいます。そういう方に出会いますと、私たちは展示の目的の一端は達成したと思います。

観覧者からのいろいろなご意見は、ありがたく承つていきます。ただ、本来の目的は、こういうことを言いたいからこういう構成にしたということがあります。それを付け加えさせてください。

**司会**——ありがとうございます。館内からの質問の一つ目です。「杉田玄白と小塚原の仕置場」というタイトルからは蘭学色が強いのかと思ったが、展示はそうではな

かった。タイトルに「玄白」を付けたのは不満だと。二つ目は、展示名が展示内容とフィットしていない。展示では、腑分けが刑罰の機能の一つとして挙げられているが。この辺、ご回答をお願いします。

**亀川**——はい。資料的に蘭学のところが少なかったのは自覚していますが、展示空間の制限もあって、実はセーブしたところもあります。

仕置場の機能の一つとして腑分けがあるのに、それだけで展示構成の一パートにしたのは、これを展示構成に入れて、タイトルに「玄白」という言葉を添えなければ、多分この仕置場の展示は実現できなかったという事情もあります。

**野尻**——この企画展は、亀川が蓄積していた小塚原刑場の文献調査や回向院の古文書の調査から得られたものがベースになっています。また、杉田玄白については、荒川区教育委員会が人権教育を行うに当たって、この事象を使って子どもたちに説明してきたということがあります。

私たちは企画展を多くの区民の方に見ていただくことを目指しています。今回は、特に学校教育に携わっている方々、そ

して、荒川区役所の職員に見ていただきたいと思っています。

小塚原の仕置場と聞いただけで拒絶反応を示す方や、常設で展示してあることを知らない人がいます。また、区立小学校で教えていることを知らない人もいます。ですから、私たちは、これからさらに詳しく、わかりやすく表現することを目指しています。

タイトルは、副題を入れたほうがよかったかもしれませんが。しかし、主題や副題の付け方によっては、思うように予算が付かなかつたり、起案が通らなかつたりします。そういった事情もありますが、私たちとしては自信を持って提供している内容だと思っています。

**司会**——ありがとうございます。亀川さんが地域に密着して調査して集めた資料というのは、最先端の研究でもあるかと思えます。それがこのような展覧会という形で、一般の人も見られるように公開できたのは、画期的なことだと思います。また、野尻さんから、まとめたお話をいただきました。

最後に、江戸東京フォーラム委員長の陣内秀信先生がご参加です。感想を一言お願

いします。

陣内秀信(江戸東京フォーラム委員長)——今日は、見学会、展覧会、フォーラムに出席させていただきました。ありがとうございます。

難しい問題を内部的にも行政の中でも通して、展覧会に仕立て上げる。それはやりたいという強い意思と、実現させていく住民の方々、周りの方々の信頼関係があって、そこに素晴らしい調査の蓄積があって成立したことだと教えていただきました。

実は一年前から、私は中央区の郷土天文館(タイムドーム明石)の館長をしていまして、東京の中にいろいろな地域で頑張っている博物館、資料館、文化館があることを強く認識するようになりました。江戸東京学も考えてみると地域学です。東京の特徴というのはその中にたくさん、本当に個性のある、面白い問題を抱えている地域がいっぱいあることです。多分、外国の都市を見ても一つの都市の中に都市全体の歴史博物館があつて、またそれぞれの地域の中にローカルな歴史博物館があるという構造はあまりないのではないのでしょうか。東京は本当にすごいなと思います。

今日の企画と司会をなさっている小林克

さんは、もともと江戸東京博物館で考古学を中心に活躍されてきました。江戸博も大きな役割をしているのですが、東京の地域を構成している区ごと、あるいは市の博物館で日常丹念にお仕事をされて、地域に発信していращやる方々から、われわれも学ばせていただきたい。もつと横にネットワークをつないでアピールすべきではないか。そうしないと、江戸東京学も乗り越えられないという思いで、今回、この企画を住総研として始めました。第一回目をこの文化館でやらせていただき、難しいテーマでしたが実に刺激的で面白い内容でした。

特に解剖などというのは、例えばイタリアで言うパドバ大学に解剖学教室というのがあります。一六世紀です。そこでも死体をこっそりお墓から運んできて、それを解剖していた。もともとレオナルド・ダ・ヴィンチが解剖を始めたという話もありますが、それが医学の発展のために役立った。そのような宗教権力から隠れながら、医学の発展のために貢献したということがあります。日本の場合も、小塚原と解剖学、あるいは医学の発展がここまで深く結びつ

ていたというのも、今回のもう一つのテーマだったわけですが、非常に刺激的でした。

土居さんのコメントのなかで、近代になって歴史がどう再構築されていくか、この重要なテーマに亀川さんが第三部でチャレンジされていたことについて触れられていましたが、なるほどと思いました。日本の都市のポイントは、濃密な歴史の記憶があるのだけれども、どんどん建て替わって、歴史が表面上から消えてしまっている。どうやってわれわれがその歴史を受け継ぐのかというのは、特殊な状況にあるのではないかと思います。また、小林さんの専門である近世考古学の成果もすばらしいと思います。これらはかなり日本固有の面白さではないかと思っています。

今日は、まだまだ地域の歴史を浮かび上がらせる可能性がいっぱいあるということも教わりました。住総研の江戸東京フォーラムが、地域で頑張っている博物館と一緒にやらせていただいたことは、本当に良かったと感謝しています。

司会——ありがとうございます。以上で、第一七三回住総研江戸東京フォーラムを終了いたします。



## 1986年

- |     |                        |         |         |
|-----|------------------------|---------|---------|
| 第1回 | 江戸東京フォーラム委員会の進め方と話題提供  | 小 木 新 造 | 歴史民俗博物館 |
| 第2回 | 都市下層社会の形成と変容           | 内 田 雄 造 | 東洋大学    |
| 第3回 | やわらかい都市構造              | 陣 内 秀 信 | 法政大学    |
| 第4回 | 考現学の考古学                | 佐 藤 健 二 | 法政大学    |
| 第5回 | 明治期の道路(街区)・路地の幅員基準について | 石 田 頼 房 | 東京都立大学  |

## 1987年

- |      |                 |          |         |
|------|-----------------|----------|---------|
| 第6回  | 博覧会と盛り場の明治      | 吉 見 俊 哉  | 東京大学    |
| 第7回  | 明治期の繁華街の建築      | 初 田 亨    | 工学院大学   |
| 第8回  | 東京の土地・住宅史       | 長谷川徳之輔   | 建設経済研究所 |
| 第9回  | 江戸の構成と構造        | 加 藤 貴    | 北区教育委員会 |
| 第10回 | 水の都・深川成立史       | 吉原健一郎    | 成城大学    |
| 第11回 | 江戸の建築技術         | 西 和 夫    | 神奈川大学   |
| 第12回 | 松浦武四郎の一畳敷の書齋    | ヘンリー・スミス | コロンビア大学 |
| 第13回 | 徳川の旧家臣のみた、江戸・東京 | 井 上 勲    | 学習院大学   |
| 第14回 | 路上から見た江戸・東京     | 藤 森 照 信  | 東京大学    |
| 第15回 | 東京書物探索入門        | 大 串 夏 身  | 都立中央図書館 |
| 第16回 | 神田のサウンド・スケープの研究 | 鳥 越 けい子  | 法政大学    |

## 1988年

- |      |                            |         |           |
|------|----------------------------|---------|-----------|
| 第17回 | 絵画史料にみる江戸の町                | 波 多 野 純 | 日本工業大学    |
| 第18回 | 明治期東京の飲料水販売                | 松 平 康 夫 | 東京都公文書館   |
| 第19回 | 江戸城御殿の室内空間について—障壁画下絵による復原— | 西 和 夫   | 神奈川大学     |
| 第20回 | 小江戸・川越のまちとすまい              | 内 田 雄 造 | 東洋大学      |
| 第21回 | 現代東京の祝祭                    | 松 平 誠   | 立教大学      |
| 第22回 | 丸の内の変遷とそこに働くサラリーマンの職と住     | 岡 本 哲 志 | 岡本都市建築研究所 |
| 第23回 | 浅草寺の境内・門前世界                | 竹 内 誠   | 東京学芸大学    |
| 第24回 | 都心定住を考える—市街地の「町」の現代的意味—    | 奥 田 道 大 | 立教大学      |
| 第25回 | 都市社会調査の歴史から                | 佐 藤 健 二 | 法政大学      |
| 第26回 | 世界都市東京の光と影                 | 町 村 敬 志 | 筑波大学      |

## 1989年

- |      |   |         |         |
|------|---|---------|---------|
| 第27回 | 都市の語り出す物語                                     | 宮 田 登   | 筑波大学    |
| 第28回 | 江戸の都市計画—江戸前島を中心として—                           | 鈴 木 理 生 | 区立京橋図書館 |
| 第29回 | 江戸の武家屋敷について                                   | 北 原 糸 子 |         |
| 第30回 | 江戸の被差別・東京の被差別—もうひとつの江戸・東京—                    | 大 串 夏 身 | 都立中央図書館 |
| 第31回 | 江戸東京の遊び—かるたを中心に—                              | 村 井 省 三 | 村井かるた館  |
| 第32回 | 森鷗外の都市論                                       | 石 田 頼 房 | 東京都立大学  |
| 第33回 | 東京都心部における空間利用形態                               | 山 下 宗 利 | 筑波大学    |
| 第34回 | 「響き」としての東京の街なみ—神田地区における建物の形態が道の音環境に及ぼす影響を中心に— |         |         |



- 鳥越けい子 サウンドスケープデザイン  
 第35回 東京の都市構造の変容とアジア系外国人問題——奥田道大 立教大学

### 1990年

- 第36回 鶴屋南北の幽霊——横山泰子 国際基督教大学  
 第37回 東京と近代詩——行吉正一 江戸東京博物館  
 第38回 同潤会うぐいす谷アパートの建て替えをめぐる——マンションの老朽化と建て替え問題——  
 内田雄造 東洋大学  
 第39回 東京の地価——前田尚美 東洋大学  
 第40回 江戸の地価——伊藤好一 関東近代史研究家  
 第41回 江戸のごみ処理——伊藤好一 関東近代史研究家  
 第42回 都市農業と土地問題——石田頼房 東京都立大学  
 第43回 天皇巡幸と「帝都」としての東京——吉見俊哉 東大新聞研究所  
 第44回 江戸の名所・王子——加藤貴 北区教育委員会  
 第45回 上水からみた江戸の都市計画——波多野純 日本工業大学  
 第46回 江戸名所絵における遠近法——ヘンリー・スミス コロンビア大学

### 1991年

- 第47回 江戸図屏風にあらわれた風俗——丸山伸彦 歴史民俗博物館  
 第48回 鋏形蕙斎の江戸一目図屏風——小澤弘 調布学園女子短大  
 第49回 見立絵というもの——鈴木重三  
 第50回 江戸住宅事情——片倉比佐子 東京都公文書館  
 第51回 江戸・明治・大正のすまい——平井聖 昭和女子大学  
 第52回 最近の自治体住宅政策について——林泰義 計画技術研究所  
 第53回 東京市営住宅事業について——内田青蔵 東工大附属高校  
 第54回 東京における水際土地利用の変容——日本橋川と隅田川を中心として——  
 岡本哲志 岡本都市建築研究所  
 第55回 江戸から東京への景観構造変化——窪田陽一 埼玉大学  
 第56回 東京都の都市計画と河川運河——昌子住江 関東学院大学  
 第57回 アジアのスラムと居住へのたたかい——内田雄造 東洋大学

### 1992年

- 第58回 新宿ヤミ市の復原——松平誠 立教大学  
 第59回 鋏形蕙斎筆の「黒髪山縁起絵巻」と「江都名所図会」をめぐる——  
 小澤弘 調布学園女子短大  
 第60回 芝居町と観客——都市文化の底流をさぐる——小木新造 江戸東京歴史財団  
 第61回 「よ組」を中心とした江戸火消しの活動——鈴木栄一 千代田区議員  
 第62回 近代演劇人による伝統の発見——横山泰子 国際基督教大学  
 第63回 博覧都市江戸東京——吉見俊哉 東大新聞研究所  
 第64回 読売から新聞まで——GERALD GROEMER  
 第65回 音の風景と近代の忘れもの——大分県竹田市瀧廉太郎庭園整備計画をめぐる——  
 鳥越けい子 サウンドスケープ機構  
 第66回 三越百貨店が演出した文化生活——初田亨 工学院大学  
 第67回 ヴェネツィアの経済空間——交易・市場・職人——陣内秀信 法政大学

第 68 回 都市のまつり ..... 宮 田 登 筑波大学

**1993 年**

- 第 69 回 江戸、初期の土地問題 ..... 吉原健一郎 成城大文学  
第 70 回 江戸勤番武士の生活 ..... 竹内誠 東京学芸大学  
第 71 回 江戸のおんな ..... 杉浦日向子 江戸風俗研究家  
第 72 回 大名屋敷跡地の住宅地開発—麻布霞町の場合— ..... 加藤仁美 跡見学園短大  
第 73 回 新説・日本近代住宅史 ..... 藤森照信 東京大学生研  
第 74 回 幻の東京オリンピックと万博 ..... 磯村英一 東京都立大学  
第 75 回 東京市社会局と都市社会調査 ..... 佐藤健二 法政大学  
第 76 回 近代における東京の都市庶民住居の発展 ..... 江面嗣人 文化庁文化財  
第 77 回 江戸の町と京都の町 ..... 小川保 清水建設(株)技研  
第 78 回 「まち」の死に立ち会うとき—汐入をめぐる— ..... 伊藤毅 東京大学  
第 79 回 谷中墓地をめぐる ..... 森まゆみ 谷根千工房

**1994 年**

- 第 80 回 首都の葬送空間—江戸・東京の火葬場と墓地— ..... 八木澤壮一 東京電機大学  
第 81 回 葬式のフォークロア ..... 宮田登 筑波大学  
第 82 回 東京—極集中と今後の課題—より豊かな都市空間をめざして—  
..... 東郷尚武 東京市政調査会  
第 83 回 東京都政の 50 年 ..... 大串夏身 昭和女子大短大  
第 84 回 博物館の住宅展示を考えて—人々は生活史をどうみるか— ..... ジョルダン・サンド  
第 85 回 都市空間とセクシュアリティ ..... 上野千鶴子 東京大学  
第 86 回 メディアとしての絵はがき ..... 佐藤健二 法政大学  
第 87 回 メキシコシティと東京の間で ..... 吉見俊哉 東大社会情報研  
第 88 回 北京と東京の比較都市論—歴史的空間構造と近代化のメカニズム—  
..... 陣内秀信 法政大学  
第 89 回 川越のまちなみの復元 ..... 内田雄造 東洋大学  
..... 浅井賢治 東洋大学  
第 90 回 河鍋暁斎と江戸東京 ..... 小木新造 江戸東京歴史財団

**1995 年**

- 第 91 回 都市と美術館と絵画—パリ・ロンドンと日本— ..... 小澤弘 調布学園女子短大  
第 92 回 野村コレクション「小袖屏風」とその周辺 ..... 丸山伸彦 歴史民俗博物館  
第 93 回 終戦直後の東京の生活をさぐる資料 ..... 天野隆子  
第 94 回 歌謡曲のなかの東京 ..... 大串夏身 昭和女子大短大  
第 95 回 江戸の着物文化 ..... 田中優子 法政大学  
第 96 回 江戸東京学への招待試論 ..... 小木新造 江戸東京博物館  
第 97 回 「境内」からみた三都—三都の比較都市史序説— ..... 伊藤毅 東京大学  
第 98 回 盛り場考 ..... 神崎宣武  
第 99 回 近世都市空間の創出過程について—都市構築の基盤材調達の視点から—  
..... 北原糸子  
第 100 回 江戸東京学への招待—生活の舞台としての都市空間— ..... 小木新造 江戸東京博物館  
..... 陣内秀信 法政大学

		高階 秀爾	国立西洋美術館
		田中 優子	法政大学
	司 会	内田 雄造	東洋大学
第101回	都市の民俗学—色・音・匂の変化—	小林 忠雄	歴史民俗博物館

## 1996年

第102回	同潤会柳島アパートの生活	大月 敏雄	東京大学
第103回	同潤会による復興まちづくりと普通住宅建設について	佐藤 滋	早稲田大学
第104回	住文化の体験の場としての博物館	小澤 紀美子	東京学芸大学
第105回	縁切寺—東慶寺と満徳寺—	高木 侃	関東短期大学
第106回	考古学からみた江戸と他都市との比較	小林 克	歴史文化財団
第107回	日本パノラマ館と凌雲閣—浅草の2つの巨大建築は、当時の人々にどのような印象を残したか—	平井 聖	昭和女子大学
第108回	震災復興〈大銀座〉の街並みから	石川 幸恵	清水建設(株)
第109回	明治初年の大火と貧富分離論	石田 頼房	工学院大学
第110回	戦災復興計画の理念とその遺産—東京、仙台、名古屋、神戸、広島等をめぐって—	越沢 明	長岡造形大学
第111回	関東大震災後の東京の住宅地形成について	藤岡 洋保	東京工業大学
第112回	カフェーと喫茶店	初田 亨	工学院大学

## 1997年

第113回	橋のアーバン・デザイン	伊東 孝	日本大学
第114回	城下町大坂、江戸の都市設計	篠原 修	東京大学
第115回	東京都都市景観マスタープラン—新たな景観まちづくりへの展開—	布施 六郎	東京都
第116回	江戸・東京の湯屋	松平 誠	女子栄養大学
第117回	江戸城から宮城へ—皇居を中心とする都市空間の変容—	米田 雅子	
第118回	江戸藩邸物語	加藤 貴	
第119回	建築家、佐藤功一と都市への視線	米山 勇	江戸東京博物館
第120回	明治の歌謡にみる東京	大串 夏身	昭和女子大短大
第121回	「江戸名所図会」と長谷川雪旦	鈴木 章生	江戸東京博物館
第122回	町奉行所・定火消屋敷・聖堂・上水—絵図・図面にみる江戸の都市施設—	波多野 純	日本工業大学
第123回	参勤交代—巨大都市江戸のなりたち—	原 史彦	江戸東京博物館

## 1998年

第124回	寛永13年江戸城外堀普請と周辺地域の変化	榎木 真	新宿歴史博物館
第125回	関東・東国の部落史—部落史の「見直し」論議に引きつけて—	藤沢 靖介	部落解放研究所
第126回	明治期の被差別部落—都市東京と植民地主義の言説編制から—	友常 勉	部落解放研究所
第127回	関東大震災と朝鮮人虐殺事件	石田 貞	埼玉同和教育協
第128回	原宿の空間構造—人気の秘密を歴史から読む—	柳瀬 有志	法政大学
第129回	横浜市の市営住宅事業について	水沼 淑子	関東学院女子短大
第130回	目白文化村とその変貌	八木 澤壮一	東京電機大学
第131回	地域学の明日を考える	小木 新造	江戸東京博物館

		橋 爪 紳 也	京都精華大学
		結 城 登 美 雄	まちづくりプランナー
		森 ま ゆ み	作家／谷根千工房主宰
	司 会	陣 内 秀 信	法政大学
第 132 回	江戸歌舞伎の特色	服 部 幸 雄	日本女子大学

## 1999 年

第 133 回	東京・明治大正の人口問題	小 木 新 造	江戸東京博物館
第 134 回	江戸東京フォーラムと住総研 伝統的な履歴書	大 坪 昭	住宅総合研究財団墨壺
第 135 回	「ふるさと」としての東京深川—ある個人的な感想—	吉 田 良 太	住宅総合研究財団
第 136 回	都市と農村の蜜月時代—近郊農業の展開と流通の変化—	川 田 順 造	広島市立大学
第 137 回	永井荷風と東京	江 波 戸 昭	明治大学
第 138 回	地域雑誌からみた町	湯 川 説 子	江戸東京博物館
		立 壁 正 子	『ここは牛込、神楽阪』
		野 口 由 紀 子	『武蔵野から』
		大 野 順 子	町雑誌『千住』
	司 会	森 ま ゆ み	作家／谷根千工房主宰

## 2000 年

第 139 回	「ニュースの誕生」展と江戸東京学	木 下 直 之	東大総合研究博物館
		北 原 糸 子	東大社会情報研究所
		佐 藤 健 二	東京大学
		吉 見 俊 哉	東大社会情報研究所
		富 澤 達 三	神大常民文化研究所
第 140 回	長崎出島の復原と「海を渡った大工道具展」	西 和 夫	神奈川大学
		千 野 香 織	学習院大学
		波 多 野 純	日本工業大学
第 141 回	☆大久保にみる都市の国際化	稲 葉 佳 子	(有)ジオ・プランニング
第 142 回	☆神田多町—震災復興の「まち」から見えるもの—	小 藤 田 正 夫	千代田区まちづく公社
第 143 回	築地・横浜の外国人コミュニティ	森 田 朋 子	お茶の水女子大学
第 144 回	江戸東京フォーラムの果たした役割	太 田 博 太 郎	日本学士院
		小 木 新 造	江戸東京博物館
		陣 内 秀 信	法政大学
第 145 回	遺跡から江戸の生活文化を探る—江戸考古学最新情報—	波 多 野 純	日本工業大学
		後 藤 宏 樹	千代田区四番町資料館
		栩 木 真	新宿歴史博物館
	司 会	小 林 克	江戸東京博物館

## 2001 年

第 146 回	江戸の見世物	川 添 裕	見世物文化研究所
第 147 回	☆千住の町おこしと地域博物館の取り組み	所 理 喜 夫	足立区立郷土博物館
		荒 居 康 明	町並み研究家
		波 多 野 純	日本工業大学
		大 野 順 子	町雑誌『千住』



- 第 148 回 祭礼からみた都市空間の変容と地域コミュニティの形成—神田祭りを主な素材として—  
伊藤 裕久 東京理科大学
- 第 149 回 江戸の女性と布橋灌頂会—立山博物館の試み—  
鳥越 けい子 聖心女子大学  
米原 寛 立山博物館
- 第 150 回 都心居住の再考—江戸東京の生活史・文化史の視点から—  
波多野 純 日本工業大学  
初田 亨 工学院大学  
大月 敏雄 東京理科大学  
森 まゆみ 作家・「谷根千」主宰  
東 孝光 建築家・千葉工大  
司 会 陣内 秀信 法政大学

## 2002 年

- 第 151 回 モダン都市・東京の読書空間—読書装置の 1920～30 年代—  
永嶺 重敏 東大資料編纂所  
佐藤 健二 東京大学
- 第 152 回 近代皇族邸宅にみる和風と洋風  
水沼 淑子 関東学院大学  
小沢 朝江 東海大学
- 第 153 回 江戸と怪談と怪異空間  
内田 忠賢 お茶の水女子大学  
コメンテータ・司会 横山 泰子 法政大学
- 第 154 回 ☆向島の成立と下町気質  
佐原 滋元 向島百花園茶亭さはら
- 第 155 回 関一と近代大阪の再創造  
ジェフリー・ヘインズ オレゴン大学  
コメンテータ 石田 頼房 東京都立大学  
" 内田 雄造 東洋大学  
通 訳 ビュスト 東京大学

## 2003 年

- 第 156 回 大江戸八百八町と日本橋界限—『熙代勝覧』の世界—  
コメンテータ 波多野 純 日本工業大学  
" 森 まゆみ 作家・「谷根千」主宰  
" 竹内 誠 江戸東京博物館  
" 市川 寛明 江戸東京博物館  
コーディネータ 小澤 弘 江戸東京博物館
- 第 157 回 もう一つの東京の近代住宅史：私論  
山口 廣 日本大学
- 第 158 回 江戸のモノづくり—文化と技術のクロスオーバー— 基調講演 全相 運 韓国科学技術翰林院  
コメンテータ 川田 順造 神奈川大学  
" 高田 誠二 北海道大学  
" 中村 士 国立天文台  
" 橋本 毅彦 東京大学  
" 波多野 純 日本工業大学  
" 渡邊 晶 竹中大工道具館  
コーディネータ 小澤 弘 江戸東京博物館  
" 鈴木 一義 国立科学博物館
- 第 159 回 ☆日本近代の集合住宅の原点としての「下宿屋」  
堀江 亨 日本大学  
松山 薫 東北公益文科大学  
高橋 幹夫 文化誌研究家

- 第160回 幻燈から映画へ—転換期の映像メディア— 岩本憲児 早稲田大学  
 第161回 都市への記憶：「満州国」建築へのまなざし 古賀由起子 コロンビア大学  
 コメンテータ 西澤泰彦 名古屋大学

## 2004年

- 第162回 音楽の世界における〈邦楽と洋楽〉 秋山宏 日本大学  
 第163回 江戸東京に於けるスラムの発生と変容 内田雄造 東洋大学  
 コメンテータ 加藤貴 早稲田大学  
 第164回 ☆銀座の歴史と都市文化を考える 岡本哲志 岡本都市建築研究所  
 第165回 よみがえれ江戸遺跡—都市遺構の保存と活用に向けて—  
 基調報告 谷川章雄 早稲田大学  
 〃 波多野純 日本工業大学  
 事例報告 後藤宏樹 千代田区四番町資料館  
 〃 佐藤攻 東京都埋蔵文化財センター  
 〃 松尾信裕 大阪市文化財協会  
 〃 扇浦正義 長崎県都市整備推進課  
 司会 小林克 江戸東京博物館

## 2005年

- 第166回 江戸の養生所 安藤優一郎 江戸・都市史研究家  
 コメンテータ 勝木祐仁 文化女子大学  
 第167回 再考—小木新造の江戸東京学— 陣内秀信 法政大学  
 パネリスト 波多野純 日本工業大学  
 〃 内田雄造 東洋大学  
 〃 吉見俊哉 東京大学  
 〃 横山泰子 法政大学  
 司会 小澤弘 江戸東京博物館  
 第168回 ☆水上から江戸東京をみる—一品川の水辺と宿場— 陣内秀信 法政大学  
 波多野純 日本工業大学  
 第169回 ☆下北沢の魅力—日本型都市再生のあり方を探る— パネリスト 小林正美 明治大学  
 〃 大木雄高 ジャズ・バー Lady Jane  
 〃 吉見俊哉 東京大学  
 司会 陣内秀信 法政大学

## 2006年

- 第170回 東京エコシティー—新たなる水の都市へ— 岡本哲志 岡本哲志都市建築研究所  
 ロドリック・ウィルソン 法大エコ地域デザイン研究所  
 石川初 ランドスケープ・アーキテクト  
 田島則行 建築家・テレデザイン  
 渡辺真理 建築家・法政大学  
 久野紀光 建築家・東京工業大学  
 パネリスト 猪野忍 建築家・法政大学  
 〃 小林博人 建築家・慶応大学  
 司会 陣内秀信 法政大学

- 第 171 回 大阪くらしの今昔館—「体感する」博物館活動— 谷 直 樹 住まいのミュージアム  
司会・コメンテータ 小 澤 弘 江戸東京博物館
- 第 172 回 日本の町家—京町家と卯建の意味— 大 場 修 京都府立大学  
司 会 波 多 野 純 日本工業大学

## 2007 年

- 第 173 回 ☆杉田玄白と小塚原の仕置場 野 尻 か お る 荒川ふるさと文化館  
 亀 川 泰 照 荒川ふるさと文化館  
コメンテータ 土 居 浩 ものつくり大学  
司 会 小 林 克 東京都写真美術館
- 第 174 回 ☆地域資料としての『近代建築』 川 口 明 代 文京ふるさと歴史館  
 北 田 建 二 文京ふるさと歴史館  
司 会 森 ま ゆ み 谷根千工房
- 第 175 回 <sup>みやこ みやこ</sup> 都と京—東京と京都の人と暮らし— 酒 井 順 子 『都と京』著者  
 陣 内 秀 信 法政大学  
司 会 横 山 泰 子 法政大学
- 第 176 回 巣鴨の賑わいの原点をさぐる—江戸の拡大と巣鴨地域— 秋 山 伸 一 豊島区立郷土資料館  
 成 田 涼 子 豊島区教育委員会  
 高 尾 善 希 東京都公文書館  
 市 川 寛 明 江戸東京博物館  
 岩 淵 令 治 国立歴史民俗博物館  
司 会 小 林 克 東京都歴史文化財団
- 第 177 回 発掘資料からみる江戸東京の連続性・非連続性 谷 田 有 史 たばこと塩の博物館  
 毎 田 佳 奈 子 港区教育委員会  
 水 本 和 美 四番町歴史民俗資料館  
 仲 光 克 顕 中央区教育委員会  
 波 多 野 純 日本工業大学  
司 会 小 林 克 東京都歴史文化財団

## 2008 年

- 第 178 回 チャレンジ CG プロジェクト「江戸の町並みをつくる」 高 橋 時 市 郎 東京電機大学  
 勝 村 大 東京電機大学  
 小 澤 弘 江戸東京博物館  
 波 多 野 純 日本工業大学  
司 会 市 川 寛 明 江戸東京博物館
- 第 179 回 幻の日本万国博覧会—月島の地域学— 増 山 一 成 中央区教育委員会  
 伊 東 孝 日本大学  
コメンテータ 陣 内 秀 信 法政大学  
司 会 吉 見 俊 哉 東京大学
- 第 180 回 ☆川越のまちづくりと歴史的建造物の活用 内 田 雄 造 東洋大学  
 荒 牧 澄 多 NPO川越蔵の会  
 藤 井 美 登 利 川越むかし工房  
コメンテータ 森 ま ゆ み 谷根千工房  
司 会 陣 内 秀 信 法政大学

## 開催案内

---

フォーラムは、江戸東京フォーラム委員会で企画を検討し、年3～4回開催しています。  
開催案内は、インターネットの当財団ホームページでご覧になれます。

URL = <http://www.jusoken.or.jp/edotokyo.htm>

## 発刊物など

---

### 研究論文・報告

- ①「江戸東京、生活空間の研究」研究所報No.14号/A4判19ページ/住宅総合研究財団/1988
- ②「江戸東京フォーラム委員会活動」(1)～(7) 研究年報No.18～24/A4判51ページ/  
住宅総合研究財団/1992～1998
- ③「『江戸東京』時代の生活と政治」小木新造/A5判92ページ/住宅総合研究財団/2005.8

### 一般書籍

- ①「江戸東京を読む」A5判295ページ、筑摩書房、1991
- ②「江戸東京学への招待(1)文化誌篇」B6判290ページ/日本放送出版協会/1995
- ③「江戸東京学への招待(2)都市誌篇」B6判282ページ/日本放送出版協会/1995
- ④「江戸東京学への招待(3)生活誌篇」B6判273ページ/日本放送出版協会/1996
- ⑤「江戸東京学」小木新造/A5判225ページ/都市出版/2005

### 記録小冊子

- ①「地域学の明日を考える」B5判59ページ/住宅総合研究財団/1999
- ②「地域雑誌からみた町」B5判27ページ/住宅総合研究財団/2000
- ③「遺跡から江戸の生活文化を探る—江戸考古学最新情報—」B5判27ページ/住宅総合研究財団/2001
- ④「都心居住の再考—江戸東京の生活史・文化史の視点から—」B5判44ページ/住宅総合研究財団/2002
- ⑤「江戸のモノづくり—文化と技術のクロスオーバー—」B5判55ページ、カラー/  
文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「江戸のモノづくり」総括班/住宅総合研究財団/国立科学博物館/  
東京都江戸東京博物館
- ⑥「よみがえれ江戸遺跡—都市遺構の保存と活用に向けて—」B5判42ページ/住宅総合研究財団/2005
- ⑦「東京エコシティ—新たなる水の都市へ—」B5判46ページ/住宅総合研究財団/2006
- ⑧「都と京—東京と京都の人と暮らし—」B5判40ページ/住宅総合研究財団/2007
- ⑨「地域資料としての『近代建築』」B5判32ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑩「巢鴨の賑わいの原点をさぐる—江戸の拡大と巢鴨地域—」B5判36ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑪「杉田玄白と小塚原の仕置場」B5判32ページ/住宅総合研究財団/2009
- ⑫「発掘資料からみる江戸東京の連続性・非連続性」B5判32ページ/住宅総合研究財団/2009

### 住宅総合研究財団機関誌「すまいろん」の住総研ニューズレターページ



## 江戸東京フォーラムについて

---

江戸東京フォーラムは1986年5月に住宅総合研究財団の助成研究として発足し、7月に第1回のフォーラムを開催しました。翌年度から、当財団の活動として、現在に至っています。

フォーラムは委員会で企画がつくられます。委員は、現在、下記の通りです。主な参加者は、建築史・都市計画・歴史学・民俗学・社会学・文学・美術史・地域学・地理学等に関心ある方で、どなたでも参加することができます。自由で活発な議論や意見交換が行われます。各分野での先端的な問題意識も示され、お互いの刺激と示唆を与えあう場です。

フォーラムの目的は、一言で言えば、東京の個性を再考することです。東京は、政治、経済、情報、文化が一極集中しています。都市機能が雑然と混ざり合って、極めて輻輳した多重構造都市とも言えます。この東京を解明する方法は、江戸から今日までの一貫した視座でとらえること、都市に関心を持つ人たちが、同じフロアで情報や意見交換をして、共通の基盤を持つこと、このような立場で、江戸東京の文化の変容、都市形成、日常生活などを考えます。

フォーラムは、企画の基本柱に基づいて立案をしています。その基本柱は、①「記憶」としての都

市を考察する、②「地域研究」の掘り下げる、③環境と都市の関係を歴史的視点で考察する、の3つです。

21世紀は「都市の時代」です。全世界の人口の大半が都市に住むという、地球規模での都市化が進みつつあります。その反面、環境破壊が今日の大きな問題として浮上しました。都市景観が個性を失い、画一化していることも気になります。

そのような時代を迎え、江戸東京フォーラムでは、引き続き東京を舞台に総合的な都市研究と、その成果の市民への還元に取り組みます。

### フォーラム企画委員

#### 委員長

陣内 秀信 法政大学デザイン工学部建築学科

#### 委員(50音順)

稲葉 佳子 法政大学大学院工学研究科

入江 彰昭 東京農業大学短期大学部環境緑地学科

小沢 朝江 東海大学工学部建築学科

小澤 弘 (財)東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館

小林 克 (財)東京都歴史文化財団

波多野 純 日本工業大学生活環境デザイン学科

森まゆみ 作家

横山 泰子 法政大学工学部一般教育

吉見 俊哉 東京大学大学院情報学環

---

## 杉田玄白と小塚原の仕置場

2009年6月30日発行 ©

編集 住総研江戸東京フォーラム委員会

協力 荒川ふるさと文化館

校正+ DTP 有限会社 メディア・デザイン研究所

発行人 岡本宏

発行所 財団法人 住宅総合研究財団

〒156-0055

東京都世田谷区船橋四丁目29番8号

Tel.03-3484-5381 Fax.03-3484-5794

URL: <http://www.jusoken.or.jp>

---

## 住宅総合研究財団について

当財団は1948(昭和23)年、戦後の著しい住宅不足が重大な社会問題となっていた時期、これに憂慮した故清水康雄氏(当時清水建設社長)の提唱により、東京都の許可を得て設立された公益法人です。

現在は住生活に貢献しうる研究の委託・助成事業を中心に、住をめぐるシンポジウムやフォーラムの開催、機関誌『すまいろん』の発行等、学問と実践をつなぐ普及活動を行っています。

また、「住」に関する専門図書室を公開しています。蔵書数は書籍が約20,000冊、和雑誌が72誌、洋雑誌が10誌、学位論文が約330冊あります。江戸東京学関係図書は復刻版や古地図も含め、積極的に蒐集しています。